

〔論文〕

小学校国語科教科書の物語文教材における生物名の分析

宮 崎 大 樹
Daiki Miyazaki

大阪総合保育大学
児童保育学部

本研究の目的は、小学校国語科教科書における物語文教材を対象に、そこに出現する生物名と生物名の出現頻度及びその出現傾向を明らかにすることである。小学校国語科における物語文教材の学習では、登場人物の心情を読み取ることが重要であるが、その授業実践は容易ではない。登場人物の心情を読み取る授業実践には、新たな手がかりが必要だと言える。そこで本研究では、登場人物として擬人化して描かれることの多い動物や、登場人物の心情を表現する情景描写の一部として描かれることの多い動物・植物、つまり生物に着目した。小学校国語科の物語文教材における生物名について分析した結果、小学校国語科教科書全4社に掲載されている全115の物語教材のうち109作品に生物名が出現していることが明らかになった。また、全体の出現数としては植物の方が動物よりもやや多く、低学年では「くま」「うさぎ」「いぬ」など親しみのある動物が多く出現する一方で、学年が上がるにつれ「ききょう」「いぬふぐり」「アネハヅル」などあまり知られていないと思われる生物名が出現する傾向があることが明らかになった。

キーワード：小学校国語科教科書、物語文教材、生物名、教材分析

I はじめに

平成29年告示の小学校学習指導要領国語編（文部科学省、2018）では、教科の目標に「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す」と記されている。これに対して水戸部（2018）が「今回の改訂では、言語活動を通して資質・能力を育成するという、国語科が従来から重視していた枠組みを、教科目標に示している点に大きな意義がある」と述べているように、言語活動の重要性がより一層強調されたと言えよう。このように言語活動の充実が重視される一方で、形式的な言語活動の実施による国語科授業の質の低下や「文章・作品の読み深め」の軽視につながる可能性についても指摘されるようになった。例えば、柴田ら（2018）は、「子どもたちがより意欲的に国語学習に取り組むようになったという側面がある一方で、リーフレット作りや紙芝居作りなどが自己目的化している授業も少なくない。それらの活動に関わる時間や指導の負担の大きさのために、国語の力にとって重要な文章・作

品の読み深めや子ども相互の文章・作品についての豊かな意見交換が、事実上軽視されるという事態も起こっている」と述べている。これらのことから、学習指導要領に示される「国語で正確に理解」するためには、やはり言語活動だけでなく「文章・作品の読み深め」が、もしくは言語活動を通した「文章・作品の読み深め」が国語科の授業には必要であると言える。

しかし、本稿で取り扱う物語文教材に注目してみると、教材文である物語文を読み深めることに対する難しさや、授業を展開する難しさを感じさせられるのも確かである。それは、授業者にとって物語文教材が説明文教材や漢字などと比べて、何をどのように教えればよいのかが明確に捉えにくいことが原因の一つではないか。この点において明確にしないまま授業をすると、授業者にとって授業のねらいが明確にない、つまり児童に身につけさせたい力や目指す児童像がぼんやりとしたまま授業を展開してしまう危険性がある。このような授業を体験した児童は、自身に身に付いた力やできるようになったことを実感することができないであろう。以上のことから、物語文教材を取り扱った授業において、「何を」「どのように」教えるかを授業者が明らかにすることは非常に重要なことだと言える。

そこで、まず「何を」教えるべきかについて整理するために、平成29年告示小学校学習指導要領（文部科学

大阪総合保育大学

〒546-0013 大阪府大阪市東住吉区湯里6丁目4-26

dai-miyazaki@jonan.ac.jp

省、2018)の「C 読むこと」の指導事項から(文学的な文章)と記された部分の一部を抜粋した(表1)。

森川(2022)は、表1に示した指導事項について、「このような指導をする前提として教師に必要なものは何か。当然、教師が教材を『構造と内容の把握』『精査・解釈』しておくことである。その教材にどのような価値があり、何を教えるのか、教師が前もって見つける、それが教材解釈だ」と述べている。その上で、「今の教育現場では、『教材解釈』という言葉あまり使わなくなって、その言葉さえ知らない教師も多くいる。教材解釈という過程が疎かになっているという現状は明らかだ」と述べ、現代の教育現場における教材解釈の不十分さを指摘している。表1の内容をごくシンプルにまとめるのであれば、「登場人物に関すること」を「場面に注目しながら」教えればよいと整理できるが、その前提として森川(2022)が指摘するように、まずは教師の十分な教材解釈が必要だといえよう。そこで、本研究では国語科の物語文教材における「登場人物」に注目し、分析することとした。すると、小学校国語科の教科書における登場人物には実に「動物」が多いことに気づく。例えば「やまなし」のカニの親子、「ごんぎつね」のごん、「きつねの窓」「スイミー」「きつつきの商売」など、有名教材にも多くの動物が登場する。しかも、作中では単に動物としてではなく、せりふがあり心情のある「人物」として登場する。このように、多くの物語文教材では擬人化された「登場人物としての動物」たちが描かれている。

一方で、別の描かれ方をされている場合もある。それが、情景として描写されている場合である。登場人物の心情を読み取る上で情景描写の重要性については、学習指導要領で次のように強調されている。

情景には、登場人物の気持ちが表されていることが多い。情景について具体的に想像する際には、場面の移り変わりとともに変化していく登場人物の気持ちと併せて

考えていくことが重要である。

描写とは、物事の様子や場面、行動などを、読み手が想像できるように描いたものである。(中略)登場人物の心情は、直接的に描写されている場面に表現されている場合もあるが、登場人物相互の関係に基づいた行動や会話、情景などを通して暗示的に表現されている場合もある。このような表現の仕方にも注意し、想像を豊かにしながら読むことが大切になる。

これら情景描写においても、動物を含む生き物が効果的に用いられている。例えば、「大造じいさんとがん」における情景描写について検討した奥村(2022)は、その中で別の作品「ごんぎつね」の一文「空はカラッと晴れていて、もずの声が、きんきんひびいていました。」を引用した上で自らの解釈を述べている。この一文は、数日続いた雨がやっと上がり、穴からはい出したごんのほっとした気持ちを表した情景として描写している一文であるが、「もず」が重要な役割を果たしている。ただ空がカラッと晴れているだけではなく、もずの声がひびいているという描写を加えることで読み手の想像力を刺激し、より一層豊かに登場人物の心情を表現しようとしていると解釈できる。また、情景として描かれている生き物は動物だけではない。例えば、「大造じいさんとがん」では「らんまんとさいたスモモの花が、その羽にふれて、雪のように清らかに、はらはらと散りました。」という一文がある。大造じいさんの晴れやかで清々しい気持ちを描写する一文であるが、スモモの花を描写に加えることで、その心情をより豊かに表現しようとしていると解釈できよう。以上のことからわかるように、物語文教材の学習において動物、植物を含む生き物の果たす役割は大きい。

そこでいくつかの先行研究を確認すると、物語文教材は実に様々な観点から分析されていることがわかる。中井ら(2022)は説明文の品詞の分析を、古屋・茅野(2021)は物語文教材における動詞の分析を、小河・藤

表1 小学校学習指導要領国語編に示される指導事項(文学的な文章)の一部抜粋

	低学年	中学年	高学年
構造と内容の把握	場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えること。	登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えること。	登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えること。
精査・解釈	場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること。	登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること。	人物像や物語など全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。

田（2020）は漢字から構成される単語の分析を行った。また、言語学的な捉えからだけではないものとして、清水・茅野（2022）が物語文における人物・時・場の「設定」に着目し、その効果を明らかにしたものもある。このように、教科書教材を全体的に捉え、語彙と構造に着目した研究が多い。また、国語科という枠から少し視野を広げてみると、杉浦ら（2022）が行った小学校全教科の教科書に掲載された樹種名についての研究がある。この研究では生物の中の一部である植物に注目して分析が進められているが、動物についての言及はない。動物を含んだ生き物に注目した研究としては、西・藤森（2009）が平成18年度版小学校国語教科書（5社60冊）の全文から季節を表す語彙について分析したものがある。さらに、藤森（2009）は平成18年度版小学校国語教科書（5社60冊）における動物語彙の出現頻度について明らかにし、最も頻出したキツネに関して詳しく探究している。これらの研究は、どちらも平成18年度版小学校国語科教科書を対象としたもので、学習指導要領改訂後の令和2（2020）年度版を対象としたものではない。さらに、指導要領の改訂により、小学校国語科教科書に掲載される物語文教材にも変化があり、また出版社も1社少ない4社となった。以上のことから、現在使用されている令和2（2020）年度版小学校国語科教科書の物語文教材における「生物」に着目した分析は十分であるとはいえず、研究の対象として分析する意義は大きいと考えた。

そこで、本研究では、小学校国語科教科書における物語文教材を対象に、そこに出現する生物名（生き物の名前）と生物名の出現頻度及びその出現傾向を明らかにすることを目的とする。なお、本研究では生物の分類について、5界説をもとに分類した。生物の分類については諸説あるが、中学校の理科では、生物界を「植物界」「動物界」「菌界」「原生生物界」「モネラ界」の5界に分

ける5界説の考え方に基づいて分類されている。よって、本稿においては5界説による分類を行った。

II 方法

研究の対象は、教科書目録（文部科学省、2021）に記された令和4年度現在発行されている4社「学校図書」「教育出版」「東京書籍」「光村図書」44冊（上下別）の小学校国語科教科書に掲載されている物語文の本文中に出てくる言葉である。そのうち、「くま」「ちょう」など固有の種に限らなくとも一定の範囲で生物名を示す言葉の取り扱いについて分析をした。反対に「魚」「鳥」など広すぎる範囲を示す言葉は対象から除外した。なお、物語文自体を指す表記は教科書会社や学年によって「おはなし」や「物語」など様々であるが、本稿では「物語文」に統一した。また、各教科書の資料編や付録に記載されている物語文は分析対象としていない。

調査方法は、対象となる生物名に関する言葉を各物語文から抜き出し、生物名数（異なる生物名の数）、生物名出現頻度の分析を行った。生物名を抽出する際は、文字として掲載されている単語を集計し、「ねずみ」と「子ねずみ」や、「うさぎ」と「白うさぎ」、「ちょう」と「あげはちょう」、「ゾウ」と「アフリカゾウ」などは一つの生物名として扱った。また、「がん」と「ガン」など仮名づかいの異なるものも同様に扱った。なお、生物名ではないが「どんぐり」「きのこ」「菜っ葉」「だいじゃ」なども調査の対象とし、「どんぐり」「きのこ」「菜っ葉」はそのまま、「だいじゃ」は「へび」とした上で、生物名として取り扱った。生物名を抽出する詳細な規則については、表2に示した。なお、一つの作品に複数回出現する生物名については、複数回数えていない。つまり、出現回数は掲載作品数と同数となる。

表2 生物名抽出の規則

対象	<ul style="list-style-type: none"> ・文字として掲載されている単語 ・ひらがな，カタカナ，漢字 ・脚注 ・どんぐり，きのこ，あおむし，豆，菜種，菜っ葉 など
対象外	<ul style="list-style-type: none"> ・付録 ・かえるくん，がまくん，犬ぞり ・加工食品や乗り物の名称に含まれている生物種（ゆずみそ，犬ぞり） ・挿絵に描かれた生物 ・本文以外の扉や目次
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・いぬ，犬，イヌのように読みが同じ場合は区分せず同一のものとして集計 ・伝書ばとは「はと」，小犬は「いぬ」，子ネコは「ねこ」として集計 ・野うさぎは「うさぎ」，白くまは「くま」，山ねこは「ねこ」，白ぎつねは「きつね」として集計 ・あげはちょう，ちょうちょう，もんしろちょうは，「ちょう」として集計

Ⅲ 結果

1 生物名の出現する物語文

対象とした4社の教科書1～6年生用に掲載されていた物語文は合計115作品であった。表3に示すとおり、すべての教科書において、物語文の掲載数は低学年が最も多く学年が上がるにつれて少なくなっていた。教科書会社別に比較すると、最も掲載作品が少なかったのは教育出版の26作品で、最も多かったのは光村図書の31作品、4社の平均は28.75作品であった。

全物語文のうち、生物名が出現した作品は109、出現しなかった作品は6つであり、出現率は94.8%であった。出現しなかったのは、教育出版の「けむりのきしゃ」（1年）と「けんかした山」（1年）、東京書籍の「あめですよ」（1年）と「走れ」（4年）、光村図書の「ちいちゃんのかげおくり」（3年）と「帰り道」（6年）の6作品である。

なお、これらの作品のうち、複数の教科書に掲載されている作品が15作品あった（表4）。例えば「モチモチの木」は、全4社の教科書に掲載されている。つまり、115の作品のうち4作品は「モチモチの木」である。この後の統計処理における出現数については、複数の教科

書に掲載された作品のものを重複して数えていない。

2 各作品に出現する生物名

物語文中に出現した生物名を出現頻度の高いものから順に表5に示した。その結果、出現した生物名は全部で189語あった。「いぬ」「くま」「ねこ」が同数で最も高く、次いで「きつね」「ねずみ」、さらに「うさぎ」「ちょう」と上位には動物が続いた。植物の最上位は、9位の「すすき」であった。全体の189語のうち、動物が90語、植物が96語、菌は出現2回の「きのこ」、1回の「なめこ」と「松たけ」の3語のみであった。

3 学年別生物名の出現数

物語文中に出現する生物名を学年別に整理したものを図1に、学年別出現生物一覧を表6・7に示す。最も多くの生物名が出現した学年は、3年生であり合計63種もの生物名が出現した。一方で最も少なかったのは5年生の36種であった。生物の分類別に見ると、4年生を除く5学年で動物・植物・菌の順に多い。4年生だけは植物が動物よりも多く見られた。全学年の出現回数平均は、動物が26.8回、植物が21.3回であったのに対して、菌類は0.7回と圧倒的に少なかった。2学年ご

表3 教科書会社別物語文掲載数

（ ）内は生物種名が出現した作品数									
	学校図書		教育出版		東京書籍		光村図書		合計
1年	6	(6)	6	(4)	7	(6)	8	(8)	27 (24)
2年	6	(6)	6	(6)	5	(5)	6	(6)	23 (23)
3年	4	(4)	5	(5)	5	(5)	5	(4)	19 (18)
4年	4	(4)	3	(3)	5	(4)	5	(5)	17 (16)
5年	4	(4)	3	(3)	4	(4)	4	(4)	15 (15)
6年	4	(4)	3	(3)	4	(4)	3	(2)	14 (13)
合計	28	(28)	26	(24)	30	(28)	31	(29)	115 (109)

表4 重複掲載作品名と掲載教科書

	学校図書	教育出版	東京書籍	光村図書
海の命			○	○
おおきなかぶ	○	○	○	○
お手紙	○	○	○	○
かさこじぞう	○	○	○	
きつねのおきやくさま	○	○		
きつねの窓	○	○		
ごんぎつね	○	○	○	○
白いぼうし	○	○		○
スイミー	○	○	○	○
世界でいちばんやかましい音	○		○	
大造じいさんとがん（ガン）	○	○	○	○
注文の多い料理店	○		○	
一つの花		○	○	○
モチモチの木	○	○	○	○
わにのおじいさんのたから物（もの）	○	○		

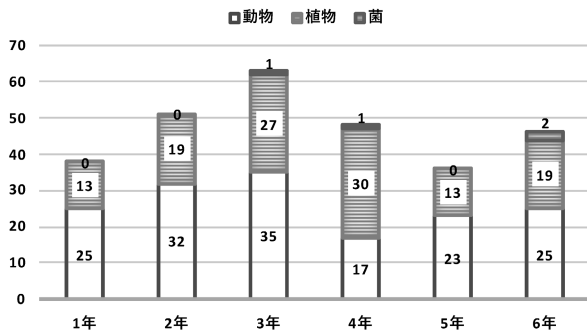


図1 学年別生物名出現回数

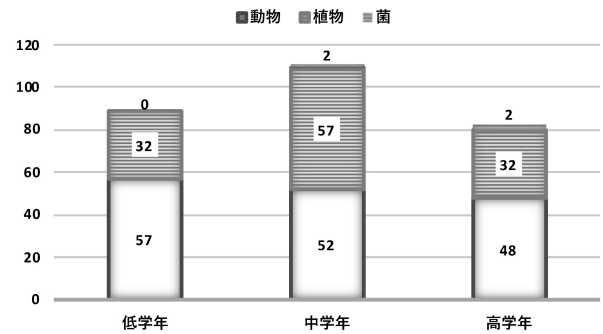


図2 生物名出現回数（2学年ごと）

とに整理（図2）すると、中学年が最も多く、次いで低学年、高学年となるが、低学年と高学年の差はわずか7であり大きくない。一方で中学年と低学年・高学年それぞれとの差は、22と31と大きなちがいが見られた。なお、「原生生物界」「モネラ界」に属する生物名は確認できなかった。

IV 考察

本研究の結果から、小学校国語科の教科書に掲載されているほとんどの物語文教材（94.8%）には、生物名の記述が見られることがわかった。これだけ多くの物語文教材に生き物の姿が描かれているのは、作品において担う生き物の役割が重要であることを示している。教科書に掲載されている樹種名について調査した杉浦ら（2018）は、「教科書に載っている樹種名は児童の生活の中で目にすることができるものを中心に取り入れられ、普段の生活と連結させることを目的にしていると考えられる」と述べている。たしかに、出現数の上位には「いぬ」「ねこ」「うさぎ」「ちょう」など、子どもたちが普段の生活で目にする機会の多いと考えられる生き物が見られる。しかし、「くま」「ねずみ」「うま」「たぬき」などは、通常生活している中で多くの子どもが目にする機会はそれほど多くないであろう。むしろ、こういった物語文教材や家庭で読む絵本などに登場する「くま」「ねずみ」などから先に親しみを感じ、その後動物園など特別な場所で目にして実物を知るという可能性も大いに考えられる。つまり、小学校国語の物語文教材に限って言えば、普段の生活と連結させることだけが目的とは言えないであろう。

物語文教材において描かれる生き物の役割は、説明文のそれとは異なり、大きく三つに分けて考えることができる。一つ目は、登場人物としての役割である。「ごんぎつね」のごんや、「スイミー」のスイミー、「注文の多い料理店」の山ねこなどがそれに当たる。例えば、「お

おきなかぶ」に登場する動物たちは登場人物の一人であるが、動物としての特徴ある行動が描かれているわけではない。しかし、人間と動物たちが一緒になって大きなかぶを抜こうとする姿を子どもたちに想像させることで、物語全体のイメージを楽しいものにし、その魅力を高めている。さらに、生き物を擬人的に描き、生き物の世界の中で生きる動物などの姿を描きながら、人間社会の縮図のように自らを投影させようとする役割もある。例えば「スイミー」や「きつねのおきゃくさま」「ニャーゴ」などがこれに当たるであろう。二つ目は、生き物本来の姿で登場させ、例えば人間との交流や、やり取りを描く対象としての役割である。「ずうっと、ずうっと、大すきだよ」「スーホの白いうま」などが、これに当たる。「大造じいさんとがん」の残雪などは、これら二つの役割の間に位置すると考えられる。最後、三つ目には、情景描写の一部としての役割である。前述の通り、登場人物の心情は情景描写を通して暗示的に表現されている場合があるが、その際に生き物の姿を描くことでより豊かに表現しようとされている。また、情景描写の一部として生き物が描かれる場合、動物よりも植物が描かれることが多かった。「ごんぎつね」では、前述のものずの声を描いた場面のほかに、「墓地には、ひがん花が、赤いきれのように、さき続けていました」などの描写が見られる。

学年ごとの出現回数では、中学年（3・4年生）が最も多く、次いで低学年（1・2年生）、高学年（5・6年生）の順であった。さらに、中学年のみ植物名の方が動物名よりも多く見られる結果となった。これは、学習指導要領（文部科学省、2018）にも示されるように、中学年国語科の学習では「情景」を手がかりに登場人物の気持ちを考えていくことが求められていることが原因だと思われる。情景描写の豊かな作品を中学年の物語教材として掲載しているがために、情景描写に多く含まれる生き物の出現率が高くなったのであろう。情景描写には植物が多く用いられるため、他の学年では見られること

表5 教科書に出てくる生物名（出現回数順）

生物名	出現回数	分類	生物名	出現回数	分類	生物名	出現回数	分類
いぬ	11	動物	アワビ	1	動物	つつじ	1	植物
くま	11	動物	あんず	1	植物	つめ草	1	植物
ねこ	11	動物	イサキ	1	動物	とうがらし	1	植物
きつね	9	動物	いせえび	1	動物	とうもろこし	1	植物
ねずみ	9	動物	いそぎんちゃく	1	動物	とかげ	1	動物
うさぎ	7	動物	いちじく	1	植物	ドジョウ	1	動物
ちょう	7	動物	いぬふぐり	1	植物	とち	1	植物
うま	6	動物	イノシシ	1	動物	トマト	1	植物
すすき	6	植物	いばら	1	植物	とら	1	動物
あり	5	動物	いも	1	植物	菜種	1	植物
かえる	5	動物	イワシ	1	動物	菜っ葉	1	植物
からす	4	動物	いわし	1	動物	夏みかん	1	植物
くり	4	植物	インコ	1	動物	なめこ	1	菌
たんぽぽ	4	植物	うぐいす豆	1	植物	ぬるで	1	植物
うなぎ	3	動物	ウニ	1	動物	のいちご	1	植物
おおかみ	3	動物	か	1	動物	パイナップル	1	植物
くも	3	動物	かえで	1	植物	ハエ	1	動物
だいこん	3	植物	かきね	1	植物	はぎ	1	植物
たぬき	3	動物	かしわ	1	植物	はちみつ	1	動物
どんぐり	3	植物	かつこう	1	動物	はと	1	動物
にんじん	3	植物	かに	1	動物	羽虫	1	動物
ほおの木	3	植物	かばの花	1	植物	ハヤブサ	1	動物
りす	3	動物	かぶ	1	植物	ばら	1	植物
あひる	2	動物	かぼちゃ	1	植物	はりねずみ	1	動物
ウサギ	2	動物	がまずみ	1	植物	ひいらぎ	1	植物
うし	2	動物	カモ	1	動物	ひがん花	1	植物
かき	2	植物	かもめ	1	動物	ひのき	1	植物
かたつむり	2	動物	かれい	1	動物	ひょうたん	1	植物
きのこ	2	菌	かわせみ	1	動物	ひよこ	1	動物
キャベツ	2	植物	ガン	1	動物	ふき	1	植物
きゅうり	2	植物	きいちご	1	植物	ふきのとう	1	植物
コスモス	2	植物	ききょう	1	植物	ふじづる	1	植物
米	2	植物	きす	1	動物	ブタ	1	動物
こんぶ	2	植物	きつつき	1	動物	ふでりんどう	1	植物
さくら	2	植物	きび	1	植物	ぶな	1	植物
しか	2	動物	きんぎょ	1	動物	ペンギン	1	動物
しば	2	植物	金魚	1	動物	ほおずき	1	植物
しらかば	2	植物	クエ	1	動物	まぐろ	1	動物
すいせん	2	植物	クジャク	1	動物	まつ	1	植物
すぎ	2	植物	くじら	1	動物	松たけ	1	菌
すずめ	2	動物	くらげ	1	動物	松虫	1	動物
スモモ	2	植物	クローバー	1	植物	豆	1	植物
せみ	2	動物	こい	1	動物	みつばち	1	動物
ゾウ	2	動物	こおろぎ	1	動物	麦	1	植物
竹	2	植物	ごぼう	1	植物	もず	1	動物
ひつじ	2	動物	米つぶ	1	植物	もみ	1	植物
プラタナス	2	植物	桜	1	植物	もも	1	植物
ブリ	2	動物	さくらんぼ	1	植物	やしの木	1	植物
へび	2	動物	サザエ	1	動物	ヤブガラシ	1	植物
もぐら	2	動物	さざんか	1	植物	山つつじ	1	植物
やぎ	2	動物	さつまいも	1	植物	山鳥	1	動物
やなぎ	2	植物	サボテン	1	植物	やまなし	1	植物
よもぎ	2	植物	さる	1	動物	ゆず	1	植物
青じし	1	動物	鹿	1	動物	ゆり	1	植物
青じそ	1	植物	しだ	1	植物	ライオン	1	動物
あおむし	1	動物	じゃがいも	1	植物	レタス	1	植物
赤とんぼ	1	動物	白かば	1	植物	レモン	1	植物
あさぎ	1	植物	すげ	1	植物	れんげつつじ	1	植物
あし	1	植物	すみれ	1	植物	ろば	1	動物
あじ	1	動物	タイ	1	動物	わかめ	1	植物
あなぐま	1	動物	たちつぼすみれ	1	動物	わに	1	動物
アネハヅル	1	動物	タニシ	1	動物			
アヒル	1	動物	タブの木	1	植物			
あわ	1	植物	チューリップ	1	植物			

表6 学年別出現生物名一覧(1～3年生)

1年			2年			3年		
生物名	出現回数	分類	生物名	出現回数	分類	生物名	出現回数	分類
くま	5	動物	くま	3	動物	うさぎ	3	動物
いぬ	4	動物	うし	2	動物	かえる	3	動物
ねずみ	4	動物	おおかみ	2	動物	からす	3	動物
ねこ	3	動物	きつね	2	動物	あり	2	動物
あり	2	動物	竹	2	植物	くま	2	動物
こんぶ	2	植物	ちょう	2	動物	さくら	2	植物
りす	2	動物	ねずみ	2	動物	だいこん	2	植物
あおむし	1	動物	へび	2	動物	たんぼぼ	2	植物
いせえび	1	動物	あひる	1	動物	ねずみ	2	動物
いそぎんちゃく	1	動物	あわ	1	植物	ほおの木	2	植物
うさぎ	1	動物	いせえび	1	動物	青じし	1	動物
うなぎ	1	動物	いそぎんちゃく	1	動物	あじ	1	動物
うま	1	動物	いぬ	1	動物	あなぐま	1	動物
かえる	1	動物	ウサギ	1	動物	あまがえる	1	動物
かき	1	植物	うさぎ	1	動物	いぬ	1	動物
かたつむり	1	動物	うなぎ	1	動物	いばら	1	植物
かぶ	1	植物	うま	1	動物	うぐいす豆	1	植物
からす	1	動物	かえる	1	動物	ウサギ	1	動物
きつね	1	動物	かき	1	植物	うま	1	動物
キャベツ	1	植物	かたつむり	1	動物	おおかみ	1	動物
きゅうり	1	植物	からす	1	動物	かえで	1	植物
きんぎょ	1	動物	きいちご	1	植物	かきね	1	植物
くじら	1	動物	クジャク	1	動物	かたつむり	1	動物
くらげ	1	動物	くも	1	動物	かっこう	1	動物
くり	1	植物	くらげ	1	動物	がまずみ	1	植物
さる	1	動物	コスモス	1	植物	かもめ	1	動物
すずめ	1	動物	ごぼう	1	植物	かれい	1	動物
ゾウ	1	動物	米	1	植物	きつつき	1	動物
ちょう	1	動物	こんぶ	1	動物	きつね	1	動物
とうもろこし	1	植物	すぎ	1	植物	きのこ	1	菌
トマト	1	植物	すげ	1	植物	くも	1	動物
にんじん	1	植物	すすき	1	植物	米	1	植物
のいちご	1	植物	すずめ	1	動物	しか	1	動物
ふき	1	植物	たぬき	1	動物	しらかば	1	植物
まぐろ	1	動物	とかげ	1	動物	すいせん	1	植物
もぐら	1	動物	にんじん	1	植物	すすき	1	植物
やしの木	1	植物	ねこ	1	動物	すみれ	1	植物
わかめ	1	植物	ばら	1	植物	たちばなすみれ	1	動物
			ひつじ	1	動物	ちょう	1	動物
			ひのき	1	植物	つつじ	1	植物
			ひよこ	1	動物	つめ草	1	植物
			ふきのとう	1	植物	とち	1	植物
			ペンギン	1	動物	とら	1	動物
			ほおずき	1	植物	どんぐり	1	植物
			ほおの木	1	植物	ぬるで	1	植物
			まぐろ	1	動物	ねこ	1	動物
			まつ	1	植物	はちみつ	1	動物
			もも	1	植物	はりねずみ	1	動物
			やしの木	1	植物	ひいらぎ	1	植物
			わかめ	1	動物	ふじづる	1	植物
			わに	1	動物	ふでりんどう	1	植物
						ぶな	1	植物
						ぶり	1	動物
						へび	1	動物
						もぐら	1	動物
						やぎ	1	動物
						ヤブガラシ	1	植物
						山つつじ	1	植物
						よもぎ	1	植物
						ライオン	1	動物
						りす	1	動物
						れんげつつじ	1	植物
						わに	1	動物

表7 学年別出現生物名一覧（4～6年生）

4 年			5 年			6 年		
生物名	出現回数	分類	生物名	出現回数	分類	生物名	出現回数	分類
たんぽぽ	2	植物	ねこ	5	動物	うま	2	動物
ちょう	2	動物	いぬ	3	動物	きつね	2	動物
アヒル	1	動物	すすき	2	植物	青じそ	1	植物
あんず	1	植物	どんぐり	2	植物	赤とんぼ	1	動物
いちじく	1	植物	あし	1	植物	あさぎ	1	植物
いぬ	1	動物	アヒル	1	動物	アネハヅル	1	動物
いも	1	植物	あり	1	動物	あひる	1	動物
いわし	1	動物	インコ	1	動物	アワビ	1	動物
うさぎ	1	動物	うさぎ	1	動物	イサキ	1	動物
うなぎ	1	動物	ウナギ	1	動物	いぬ	1	動物
か	1	動物	うま	1	動物	いぬふぐり	1	植物
かぼちゃ	1	植物	かしわ	1	植物	イワシ	1	動物
きす	1	動物	カモ	1	動物	ウニ	1	動物
きつね	1	動物	がん	1	動物	かに	1	動物
キャベツ	1	植物	きつね	1	動物	かばの花	1	植物
くも	1	動物	きび	1	植物	かわせみ	1	動物
くり	1	植物	金魚	1	動物	ききょう	1	植物
クローバー	1	植物	くま	1	動物	キツネ	1	動物
コスモス	1	植物	くり	1	植物	きのこ	1	菌
米	1	植物	こい	1	動物	きゅうり	1	植物
さくらんぼ	1	植物	しか	1	動物	クエ	1	動物
さざんか	1	植物	鹿	1	動物	くり	1	植物
さつまいも	1	植物	しば	1	植物	こおろぎ	1	動物
しだ	1	植物	じゃがいも	1	植物	桜	1	植物
しば	1	植物	すいせん	1	植物	サザエ	1	動物
すすき	1	植物	スモモ	1	植物	サボテン	1	植物
すもも	1	植物	タニシ	1	動物	白かば	1	植物
せみ	1	動物	タブの木	1	植物	すぎ	1	植物
とうがらし	1	植物	ドジョウ	1	動物	すすき	1	植物
菜種	1	植物	菜っ葉	1	植物	せみ	1	動物
夏みかん	1	植物	にんじん	1	植物	ゾウ	1	動物
はぎ	1	植物	ねずみ	1	動物	タイ	1	動物
はと	1	動物	はと	1	動物	だいこん	1	植物
ひがん花	1	植物	羽虫	1	動物	チューリップ	1	植物
羊	1	動物	ハヤブサ	1	動物	ちょう	1	動物
ひょうたん	1	植物	ほおの木	1	植物	なめこ	1	菌
プラタナス	1	植物	山鳥	1	動物	ねこ	1	動物
松たけ	1	菌	ゆず	1	植物	パイナップル	1	植物
松虫	1	動物	ゆり	1	植物	ハエ	1	動物
豆	1	植物				ブタ	1	動物
みつばち	1	動物				プラタナス	1	植物
麦	1	植物				ブリ	1	動物
もず	1	動物				やぎ	1	動物
もみ	1	植物				やなぎ	1	植物
やなぎ	1	植物				やまなし	1	植物
よもぎ	1	植物				レタス	1	植物
レモン	1	植物						
ろば	1	動物						

の少なかった植物名が中学年に多く見られることになったと考えられる。

続いて、出現した生き物の種類に着目すると、「いぬ」「ねこ」など子どもたちにとって親しみのある生き物が見られる一方で、「プラタナス」「クエ」「ききょう」など、あまり親しみのないと思われる生き物も出現する。杉浦ら（2014）が5つの市立小学校4年生児童440人を対象に、知っている木の名前と知った理由についてアンケート調査した結果、上位20種は「サクラ・ウメ・マツ・イチヨウ・カキ・ミカン・モミジ・リンゴ・サルスベリ・ヤシ・クヌギ・クリ・ブドウ・ビワ・モモ・ナシ・スギ・バナナ・ツバキ・アジサイ」であった。この調査と本研究の結果をあわせると、児童がよく知らない木の名前も物語文教材の中では多く扱われていることがわかる。ここで明らかになったのは、樹種名についてだけであるが、そのほかの動物や植物についても同様のことがある可能性が考えられる。「プラタナスの木」など物語の題名に生物名が用いられているものや、「きつねの窓」の「ききょう」など物語の重要な場面の描写として用いられているものもある。このような、親しみのあまりない生物名が出現する傾向は学年が上がるにつれて強まる傾向にあるように思える。「ききょう」「カワセミ」などは聞いたことがあっても実際に見たことのない児童も多いであろうし、「アネハヅル」「いぬふぐり」「たちつばすみれ」などは聞いたこともないという児童がいる可能性もある。

以上のように、本研究では小学校国語科教科書に掲載されている物語文教材全体の傾向を捉えることができた。しかし、それぞれの生物が作品中でどのような役割を担い、児童の読みにどのような影響を与えるのかを明らかにできていない。さらに、それぞれの生物について、児童がどの程度知っているのか、認識しているのかも明らかにできていない。今後は、物語文ごとの詳細な分析とあわせて、国語科教科書で扱われる生物名に対する児童の認識についても明らかにするような研究が必要になってくる。

本研究では、小学校国語科の物語文教材においてどのような種類の生物がどの程度出現するのかを明らかにしようとした。その結果明らかになったことは、大きく三つである。一つ目に、小学校国語科の教科書に掲載されているほとんどの物語文教材には、生物名の記述が見られることがわかった。二つ目に、生物名の出現率は中学年が最も高く、次に低学年、高学年であり、さらに中学年では植物名の出現率が動物名のそれを上回ることが明らかになった。三つ目に、出現した生物は児童にとって親しみのあるものが多い一方で、あまり親しみのない

思われるものも多く出現したこと。さらに、その傾向は学年があがるにつれ強くなるということがわかった。生物種の名前や生態について学習しておくことが、直接的に物語文の読み深めにつながるわけではない。しかし、対象となる生物の姿や形を思い浮かべることができることは、情景描写や登場人物の心情理解の手がかりとして大きな意味を持つと考えられる。国語科の物語文教材で扱われる生物名が明らかになっていけば、例えば理科や生活の授業時間に前もって触れておくことも可能である。物語文に出てくる生物が地域にあるかどうか、総合的な学習の時間などの機会に知ることのできる機会があるかもしれない。小学校においても教科横断的な取り組みが求められ、カリキュラム・マネジメントによってより一層の教育の充実が求められる時代である。そのような時代に、本研究の結果は、教科をまたいだ学びの展開のきっかけとなり得る。さらに、教科をまたいだ学びは、より一層児童の知識を深めることになり、結果的には国語科物語文の学習において「読み深める」基礎力を養う可能性がある。

また、もう一つの視点として、授業者としての教師にとって生物種について理解しておく意味は大きい。充実した授業をするためには、先に述べたように教師の教材解釈が必要不可欠であるが、物語文教材に出現する生物について教師は十分に理解した上で授業を実践しているだろうか。ここでの「理解」は、その動物や植物などの生態を詳しく知っているということではなく、最低限の知識としてその生物の姿や形を具体的に思い浮かべることができ、情景として思い描くことができるかどうかということである。森川（2022）は教師がもっと細かな描写に目を向け、その部分を解釈する必要性について、「指導者と学習者の理解の差があることが指導を成立させるために必要であるが、その差を見つけれないことが、よく聞く『国語の授業で何を教えたらいいのかわからない』という一因でもあるだろう」と述べ、指摘している。児童の理解を問う前に、まずは教師の理解を図る必要があり、その意味において本研究で国語科物語文教材に出現する生物種名が明らかにされた意味は大きい。

以上のことから、本研究の結果は、今後、物語文教材の授業の発展にいかされていくことが期待できる。国語科の授業においては、言語活動のより一層の充実が必要不可欠である。しかし、それは「作品・文章の読み深め」を軽視してよいということではなく、限られた時間内で言語活動の充実と、読み深めを共存させる必要がある。教材に対する正しく深い理解が、そのような「共存」を可能とすると考え、今後さらに研究を深めていきたい。

V 文献

- 藤森裕治 (2009). 小学校国語教科書におけるキツネの形象に関する民俗文化論的考察－なぜキツネが教科書に最も多く出現するのか－ 読書科学, 52 (2), 83-93.
- 古屋友己・茅野正徳 (2021). 小学校国語科の物語文教材に用いられる動詞に関する一考察－教科書教材の分析及び児童の内容は空くにおける実態調査－ 教育実践学研究, 26, 287-307.
- 水戸部修治 (2018). 小学校新学習指導要領国語の授業づくり 明治図書
- 文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説国語編 東洋館出版社
- 文部科学省 (2021). 小学校用教科書目録 (平成 4 年度使用), 文部科学省 https://www.mext.go.jp/content/20210423-mxt_kyokasyo02-000014470_1.pdf (2022 年 8 月 31 日)
- 森川拓也 (2022). 硬直化した教材観を変える方法についての研究 1－教材「一つの花」の解釈を例に－ 桜花学園大学保育学部研究紀要, 25, 131-144.
- 中井悠加・藤木大輔・井上弥 (2022). 小学校国語科の教科書における説明文の分析 人間と文化, 5, 66-76.
- 西一夫・藤森裕治 (2009). 国語教科書に埋め込まれた日本文化－「雪・月・花」と季節感－ 国語科教育, 65, 19-26.
- 小河妙子・藤田知加子 (2020). 小学校国語教科書に掲載されている単語の分析－部品 (ラディカル) を共有する漢字から構成される単語の心象性特性－ アカデミア人文・自然学編, 20, 113-120.
- 奥村勉 (2022). 小学校教材「大造じいさんとがん」考－情景描写の検討－ 国語論集, 19, 134-145.
- 柴田義松・阿部昇 (2018). あたらしい国語科指導法五訂版 学文社
- 清水一寛・茅野政徳 (2022). 小学校国語教科書の物語文における人物・時・場の「設定」と効果 教育実践学研究, 27, 445-464.
- 杉浦克明・吉田早織・早川尚吾 (2018). 小学校教育課程における教科書に掲載されている樹種名 日森林学会誌, 100, 47-54.
- 杉浦克明・原崎典子・吉岡拓如・井上公基 (2014). 児童が思いつく樹種名とその理由 日本森林学会誌, 96, 43-49.

付記

本論文に関して、開示すべき利益相反事項はない。

Analysis of Names of Organisms in Narrative Texts in Elementary School Japanese Language Textbooks

Daiki Miyazaki

Osaka University of Comprehensive Children Education

This study aims to determine the frequency of occurrence of the names of organisms and creatures in narrative text material in elementary Japanese language textbooks, and the trends in their occurrence. Reading the emotions of the characters is an important part of learning narrative material in elementary school Japanese language classes. However, it is not easy to practice such lessons. New clues are required to practice reading the emotions of the characters. Here, we focused on animals, which are often depicted anthropomorphically as characters, and animals and plants, or organisms, which are often depicted as part of scenes that express the emotions of the characters. The analysis of the names of organisms in elementary school Japanese language storybooks revealed that they appeared in 109 of the 115 storybooks published in all elementary school Japanese language textbooks. The number of plant names was slightly larger than that of animal names, and while familiar animal names such as “bear,” “rabbit,” and “dog” appeared more frequently in the lower grades, names of organisms that are not so well known, such as “balloon flower,” “Grey Field-speedwell,” and “Demoiselle Crane” tended to appear as the grades increased.

Key words : elementary Japanese language textbooks, narrative text materials, biological names, analysis of teaching materials